

2022年2月6日 主日礼拝

説教題「悪より救い出したまえ」ルカによる福音書4章1～13節

主任牧師 加藤 誠

「さて、イエスは聖霊に満ちてヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を”霊”に引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた」(ルカ4章1―2節)

主イエスが弟子たちに教えられた「主の祈り」の六番目の祈りは「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」ですが、ある人は「この祈りは弱者の祈りだ」と言いました。「この世界はこころみがあふれているのだから、そのこころみの中を強く生きる力を求めるべきではないか」と言うのです。確かにどんなこころみに襲われても屈することのない、ぶれない強さを身に着けることができれば、素晴らしいことだと思います。けれども、その一方で「こころみにあわせないください」という祈りは、自分の弱さをしっかり見つめる誠実さがあります。使徒パウロは「力は弱さの中でこそ働く」(第二コリント 12・9)と言いましたが、神さまの力は私たちの弱さの中にこそ豊かに働く、不思議な恵みです。自分の力を誇る者は、神さまの恵みを見失い、神さまの力を体験することができませんが、自分の弱さを知る者は、神さまの力を体験し、神さまの恵みを証しするのです。これは人間の目には不思議ですが、神さまの恵みの真理です。

ところで「我らをこころみにあわせず」という時の「こころみ」という言葉は、日本語では「試練」とも「誘惑」とも訳すことのできる言葉だそうです。「試練」というと辛く厳しいものというイメージ、「誘惑」というと甘いものというイメージがありますが、どちらも人間の心を神さまから引き離すという点では同じです。そして「試練」や「誘惑」において、私たちの心を神さまから引き離すようにささやき、働きかける者を聖書は「悪魔」と呼びます。

ドストエフスキーは「人間の心は天使と悪魔の戦場だ」と語りましたが、自分の心の中を見る時、ほんとうにそうだと思います。神さまは私たちの心を守るために天使を送って良心を授けてくださいますが、私たちの中から悪魔が消えてなくなることはなく、私たちの心に悪魔のささやきが聞こえない日はありません。それゆえ私たちの心の中では毎日、天使と悪魔がせめぎ合い、両者の戦場になるのです。

主イエスも私たちと同じように悪魔と天使とのせめぎ合いを体験されました。神の子だから悪魔のどんなそそのかしも通じず、超然としていたのではないのです。神の子だからこそ、悪魔はものすごい力で主イエスを悪に引き込もうと働きかけたのでした。「その悪魔と真正面から戦うことなしに、神の国の福音を宣べ伝えることはできない」と心決められて、主イエスは荒れ野に出て行かれたのです。

その主イエスに対する悪魔の一つ目のこころみは「お腹がすいているのなら、この石にパンになるように命じたらどうだ？」というもの。主イエスには神さまから奇跡を起こすことのできる不思議な力が与えられていましたが、その力を自分のお

腹を満たすために使ったらいいじゃないか！...という誘惑です。

二つ目のころみは「わたし（悪魔）を拝みさえすれば、世界中の一切の権力と繁栄を与えよう」というもの。力とお金ほど、魅力的なものはありません。ほんの少しだけ悪魔に頭を下げさえすれば、それはお前のものになると悪魔はささやくのです。何と甘い、誘惑のささやきでしょうか。

そして三つ目のころみは「神殿の屋根の上から飛び降りてみる。そうしたら天使が守ってくれるはずだ」というもの。これは「天使の力を借りてスポットライトを浴びるようなパフォーマンスをしたらいい。そうすれば君は人々のヒーローになれる」という誘惑です。主イエスには奇跡を行う不思議な能力に加えて、人々の心に親しく語りかける優れた言葉が与えられていましたから、その気さえあれば、いつでも人々のヒーローになり、称賛をわが物にすることができました。

しかし主イエスは「神から与えられた力を自分のために用いることはしないし、悪魔に頭を下げて手を結ぶこともしない、そして人々の称賛を求めることはしない」と、悪魔のささやきを正面から跳ね返して、神さまの御心にしっかりと心と体を定めて歩まれたのでした。例えば、五千人の供食の場面では、主イエスは弟子たちの手もとにあった「五つのパンと二匹の魚」を人々と分かち合うために差し出させています。また、弟子のヤコブとヨハネが「主よ、栄光をお受けになる時、私たちの一人を右に、もう一人を左につけてください」とお願いすると、「お前たちは自分が何を求めているのか分かっていない」と厳しく叱りつけています。そして最後の裁判でピラトが「わたしにはお前の命を助けることも殺すこともできる権威をもっている」と脅しますと、「神がおゆるしにならなければ、あなたは何もすることができない」とピラトの権力をバツサリと切り捨てたのでした。

主イエスが荒れ野で悪魔から受けた「三つのころみ」は、私たちが日々経験する「ころみ」です。特に主イエスに従って神の働きを担わせていただくと思う時には必ず直面するものです。私たちの心には「神さまから与えられた力を少しくらい自分のために使っていいじゃないか」という思いが常にありますし、悪魔の誘い、ささやきについつい心を揺さぶられ、「悪いことと分かっているながら、つい手を出してしまう」弱さを抱えています。そして教会の奉仕などでも、自分がしたことが褒められ、評価されることをどこかで求める心があり、逆に無視されたり、軽んじられると、腹を立ててすねてしまう。「神さまのため」と言いながら、「自分をアピールしている」ことが多いのではないのでしょうか。

けれども、この世界の中で神さまの働きを担うことは、それらのころみと正面から戦われた主イエスの背中を見ながら、その主イエスの後に従っていくことです。その時に「自分は悪魔と戦える強さを持っているのだ」と過信することなく、「自分は悪魔の誘惑にほんとうに弱い。ですから神さま、どんな時もこの弱いわたしを悪から守っていてください！」と、自らの弱さを自覚しつつ、神の助けをいただきながら、主イエスに従っていく者とされたいのです。